の場合でも大きな影きょうをうけていると考えてよいであろう．

なお，これらの例は強風のため流線がより明瞭に現われたものとみられるが，よわい風の場合もこの傾向はあるはずである．例えば，上記のような S～SW 風が卓越するとき，埼玉から北関東にかけて光化学スモッグの高汚染が発生するのは，このような流線の迂回・合流（収束）が関与している場合があると思われる．従って光化学スモッグ発生機構の追求のためにも，このような局地風のより詳細な調査が必要となるであろう．

【新刊紹介】

藤田哲也

たつまき（上）――渦の驚異――

共立出版，科学ブックス20　¥780

時折訪れては，日本の気象界に新鮮な空気を送り込んでゆく著者は，今回は珍らしい「たつまき」をものにしていった．一言で本書を紹介するなら，渡米して20年，たつまきの本場であるアメリカで研究を続けた．エネルギッシュな著者が世界をかけめぐり，集めた豊富な資料を使い，また自身の貴重な体験を基に，たつまきという一つの気象現象をわかり易く解説し，その恐しさを示した．一般的な教養書であるといえ，掲げられた多くの写真や図表は，その道を専門とする気象学者にも貴重な資料として後々迄も残すにたるものである．内容の面白さはもとよりのこと，一貫して流れるユーモアーたっぷりな筆さばきは読む人をあきさせない．

本書は七章にわたって書かれているが，第一章においては，たつまきの正体をあばき，「象の鼻」のようなロート雲の出来るわけやロート雲とたつまきの強さとの関係などがわかりやすく解説されている．しかし，一般的な教養書としたためか，全体として，物理学的気象学的なつっこみが不足している．いたしかたないことと思われるがおしまれるところである．下巻に期待したい．

第二章では，秒速百数十メートルの風速をもち，ほぼ東京大阪間にあたる距離を，平均時速100キロのスピードでかけぬける強列たつまきなどがやってのける数々のミステリーを掲げ，読者の興味をさそう．なかでも，畑の大根を引き抜かれた話，たつまきによる気圧の急変のために，鶏がまるはだかにされた話，100台もの自動車がヘッドライトだけを割られた話，乳しぼり中の牛が消えた話，三年つづけて同じ町が，同じ日，同じ時間にたつまきにおそわれた話など，全く傑作である．またそれらに対して，著者なりの解釈がなされ，珍らしいたつまきの面白さ恐ろしさに，読者を引き込んでゆく．

第三章はたつまきのスケールの問題を取り扱い，被災の状況や大きさなどから，たつまきの強さの分類や階級づけなどを論じている．今後，専門家の問題とするところとなろう．

第四章では特殊なたつまきの発生とそのふるまいを述べている．例えば，親雲と双子のたつまきとの関係，四つ子のたつまき，更には，殆んど時を同じくして生れた六人兄弟のたつまきなどの行状記を紹介し，たつまき形成の面白さ複雑さを論じている．

第五章では，世界中のあちこちに発生するたつまきにふれ，たつまきの発生が，両半球共に温帯地域に限られていることを明らかにしているが，この事実は，おそらく著者によって初めて指摘された事柄であり，今後注目され問題となるところとなろう．但し，ここでも地形との関係に，もう少しのつっこみが不足しているため，なにかものたりなさが感じられる．

第六章以下では，アメリカのたつまきと比較しながら日本のたつまきを論じているが，そのなかで，都市化とたつまきとの問題を取りあげ，都市化が進むにつれ，たつまきが都心をさけ，大都市周辺で発生し易くなっている事実を示し，警告していること，更には，関東，東海道，宮崎県で強いたつまきのおこる可能性があることを指摘していることは注目に値いする．今後おおいに問題となろう．

以上は内容の一部を簡単に述べた迄であるが，たつまきという一つの名題で，以上のような内容を持った単行本が，わが国で発刊されたのは本書が始めてであると思う．一般的な教養書としても，また，専門家の一資料としても，是非一読されることをおすすめする．

（飯田睦治郎）